

小児歯科患児保護者の歯科用語認知率に関する検討

夏堀 裕之, 両川 明子, 浅川 剛吉, 浅川 麻美, 田中 光郎

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

(主任 : 田中 光郎 教授)

(受付 : 2005年11月1日)

(受理 : 2005年12月1日)

Abstract : In order to establish an even and patient-oriented relationship between patients and dentists, the importance of smooth, bi-directional communication should be increasingly recognized. Dentists should make efforts to explain the treatment contents and instruct oral health care using clear and understandable words. The dental terminology sometimes can be a barrier to better mutual understanding between patients and dentists. In this study, the recognition rate for dental terms in guardians of child patients was investigated using a questionnaire method. Also, the recognition rate of the guardians for dental terminology was speculated by pediatric dentists, dentists under first year residency and dental students of 1 st, 4 th, 5 th and 6 th year using the same questionnaire. Prior to asking them to complete the questionnaire, the purpose and content of this study was explained to the subjects and consent was obtained.

Among the 33 dental terms, "gingiva", "wisdom tooth" and "milk teeth" were 100% recognized by the guardians and nine other terms showed a recognition rate of more than 90%. As for speculation by dentists and dental students, they estimated the recognition rate lower than the actual rates in many cases, which means that the possibility is low for them to make explanations using dental terminology that is unfamiliar to the guardians.

There existed a certain amount of gap between the recognition rate of dental terminology in the guardians of child patients and the estimation by the dentists and dental students. These results indicated that the explanations by dentists to the guardians of child patients should be conducted confirming carefully that they understand it.

Key words : dental terminology, informed consent, recognition

緒 言

現代医療の現場において、医師と患者の関係が対等な立場である相互参加型、または患者中心型の医療が求められるようになり、医療情報の収集、相互信頼関係の形成およびモチベーションの向上を目的とした医療面接は、歯科治

療を円滑に行う上で重要性を増して来ている¹⁻⁶⁾。また、歯科学生教育においても良好な歯科医師-患者関係が教育される必要性が強調されており^{7,8)}、医療面接における、歯科医師と患者との良好な関係を構築するためのコミュニケーション技能の重要性が認知されている。小児歯科臨床において、定期的な診査を続ける長

An investigation of recognition rate of dental terminology in the guardians of child patients
Hiroyuki NATSUBORI, Akiko RYOKAWA, Takeyoshi ASAKAWA, Asami ASAKAWA, Mitsuro TANAKA
Department of Pediatric Dentistry, School of Dentistry, Iwate Medical University
1-3-27 Chuo-Dori, Morioka, Iwate 020-8505, Japan

岩手県盛岡市中央通1丁目3-27 (〒020-8505)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 30 : 228-234, 2005

期管理の重要性とその必要性を伝え理解を得たり、治療の前後に内容を説明して注意すべきことを伝えたりする際には、主に保護者と良好なコミュニケーションを持ち、十分な説明の下に同意や納得を得て行う必要がある。インフォームドコンセントを得るためのコミュニケーションの要件として、専門用語の使用を控えることや考える時間を与えること、およびプライバシーの保護等があげられるが、このインフォームドコンセントをより確実なものにするために、説明する側（歯科医師）は説明を受ける側（患児の保護者）により分かりやすく、誤解を生じないような言葉で、その内容を伝えるように努力するべきであろう。その際に用いる言葉は慎重に選択するべきであり、とくに専門用語である歯科用語は、時によっては意思疎通の障害となりうることを念頭におく必要がある。患児の保護者の歯科用語に対する認知率は、インフォームドコンセントを得る上で非常に重要な情報であり、保護者への説明に当たっては、その用語の認知率に十分な配慮を払うべきである。

そこで本研究では、保護者を対象に比較的使用頻度の高い歯科用語を中心にアンケート方式による調査を行い、どのような歯科用語が一般的に理解されるのか、認知されているのかについて分析・検討を行った。他方、患児または保護者に説明を行う側である歯科医師と歯科学生が、説明を受ける保護者がどの程度歯科用語を理解しているかを知ることは、わかり易い説明をすることができるか否かを左右する重要な要因となる。小児患者の保護者という集団に対して、その立場が歯科医師ではないが、さりとて全く歯科の専門知識のない一般集団でもないという意味で、その中間にあると考えられる歯科学生が、歯科の専門的な学科を学んで行く中で、その意識に何らかの変化が生じる可能性も考えられることから、この歯科用語の認知率について、歯科医師ならびに歯科学生の意識も併せて調査を行った。

対象と調査方法

平成15年7月から9月にかけて、岩手医科大学歯学部附属病院（現岩手医科大学附属病院歯科医療センター）小児歯科外来を受診した患児の保護者157名を対象にアンケート調査を行った。小児歯科外来で比較的頻繁に用いられるものを中心に、33項目の歯科用語を選出し、各用語について「知っている」、「知らない」のどちらかを選択してもらった無記名記入方式とし、調査を行ったアンケートは記入終了後ただちに回収した。この33項目には、“六歳臼歯と第一大臼歯”、“歯垢とプラーク”、“犬歯と糸きり歯”、“親知らずと第三大臼歯”の4組の同意語を含めて、その認知率の違いを調査した。患児の保護者157名の内訳は母親が140名、祖母が3名、父親が8名、その他が6名である。事前に、アンケート内容の主旨を記入者に説明し、同意を得た。

一方歯科医師、歯科学生に対してもアンケートを行い、保護者に対して行った調査項目を、保護者が「知っている」と回答するであろうと考えれば、「知っている」に丸をつけ、「知らない」と回答するであろうと推測する場合は、「知らない」に丸をつけるように依頼した。歯科学生については本学歯学部の学生で、1年生74名、4年生（基礎実習前・OSCE試験未実施）71名、5年生（臨床実習前・OSCE試験実施後）75名、6年生（臨床実習修了後・4年生の時点でOSCE試験実施済）42名であり、歯科医師については、臨床研修歯科医師が25名、小児歯科医局員が10名であった。

結 果

保護者の認知率

Table 1には調査した歯科用語に対する保護者の認知率（知っていると回答した方の比率）をパーセンテージにして示し、認知率の高い順に配列した。歯肉、親知らず、乳歯についてはすべての保護者が「知っている」と回答し、八重歯、ブラッシング、銀歯、フッ素、抜歯、歯

Table 1. Recognition rate for the dental terminology in guardians of child patients

term	rate(%)	term	rate(%)
歯肉 (gingiva)	100.0	シーラント (sealant)	60.5
親知らず (wisdom tooth)	100.0	象牙質 (dentine)	60.1
乳歯 (milk tooth)	100.0	フロス (dental floss)	47.1
八重歯 (double tooth)	98.7	第一大臼歯 (first permanent molar)	34.9
ブラッシング (brushing)	98.1	歯髄 (dental pulp)	34.2
銀歯 (capping)	98.1	過剰歯 (excessive tooth)	31.0
フッ素 (fluoride)	98.1	齲蝕 (tooth decay)	29.1
抜歯 (extraction)	96.8	インプラント (implant)	28.5
歯垢 (plaque)	95.6	第三大臼歯 (third molar)	24.1
歯周病 (periodontal disease)	95.5	乳歯冠 (crown)	13.3
歯石 (dental calculus)	93.7	石灰化不全 (mal-calcification)	12.7
糸きり歯 (eyetooth)	90.5	レジン (dental resin)	10.1
犬歯 (canine tooth)	84.1	叢生 (crowding)	6.3
エナメル質 (dental enamel)	76.6	ラバーダム (rubber dam)	5.1
六歳臼歯 (six year molar)	76.4	減形成 (hypogenesis)	4.4
咬合 (occlusion)	68.3	リーウェイスペース (leeway space)	1.9
プラーク (dental plaque)	61.4		

垢, 歯周病, 歯石, 糸きり歯の9項目については「知っている」と回答した人が90%以上であった。それに対し, リーウェイスペース, 減形成, ラバーダム, 叢生, レジン, 石灰化不全, 乳歯冠の7項目については「知っている」と回答した人は20%以下で, 認知率が低かった。

4組の同意語については, 「親知らず」が100%であるのに対し, 「第三大臼歯」は24.1%でその差が最も大きかった。また, 「歯垢」は95.6%で, 「プラーク」は61.4%, 「六歳臼歯」が76.4%で, 「第一大臼歯」が34.9%であった。また, 「糸きり歯」と「犬歯」はそれぞれ90.5%, 84.1%で, これが4組の中で認知率の違いがもっとも小さかった。

2. 認知率の推測と実態

歯科学生, 歯科医師が推測した, 保護者の認知率についての推測値(%)と実際の保護者の認知率とを, 歯科学生の学年別に, そして歯科臨床研修歯科医師, 小児歯科医師それぞれについて図示したのが Fig. 1 である。また, 各項目の推測値(%)と実際の認知率との差を計算して示したのが Table 2 である。この中でマイナスとは実際の認知率よりも保護者が認知していないものと推測したことを示し(以後アンダーに推測と表現), プラスは実際には認知してい

ない用語を認知しているものと推測したことを示している(以後オーバーに推測と表現)。Fig. 1 に示されているように臨床研修歯科医師も歯科学生も多くの用語においてアンダーに推測していた。とくに咬合, シーラント, エナメル質, 象牙質, 六歳臼歯, などにおいて大きくアンダーに推測していた。一方, インプラント, プラーク, 齲蝕についてはむしろオーバーに推測する傾向が強かった。

考 察

小児期は, 身体的発育とともに精神的発育も途上であることから, 治療に対するインフォームドコンセントを得る対象は保護者になる場合が多い。小児の口腔を長期に渡って管理していくためには, その必要性を保護者に説明し, 理解と承諾を得ることが必要不可欠である。またその際に, 保護者の歯科に関する用語の認知状況を歯科医師側が把握している事は説明する用語を選択する上で極めて重要であると考えられる^{9~13)}。

今回の調査で, 「知っている」と回答した人が90%以上であった用語は, 乳歯, 親知らず, 八重歯, ブラッシング, フッ素, 銀歯, 歯肉, 抜歯, 歯垢, 歯周病, 歯石, 糸切り歯の12項目であった。これらの用語の認知率が高いのは, 小

Table 2. The discrepancy between the recognition rate of each term in the guardians of child patients and speculated rate by dentists and dental students.

	first ¹⁾	fourth ²⁾	fifth ³⁾	sixth ⁴⁾	resident ⁵⁾	ped ⁶⁾	mean
シーラント (sealant)	-53.7	-49.2	-51.3	-48.6	-49.4	-50.5	-50.5
咬合 (occlusion)	-39.9	-45.8	-55.1	-39.7	-57.2	-58.3	-49.3
象牙質 (dentine)	-43.9	-33.3	-45.6	-36.3	-37.9	-50.1	-41.2
エナメル質 (dental enamel)	-49.6	-34.3	-41.1	-33.7	-37.7	-36.6	-38.8
六歳臼歯 (six year tooth)	-64.2	-56.7	-36.9	-33.5	-32	13.6	-35.0
歯肉 (gingiva)	-21.6	-12.7	-38.2	-38.1	-38.9	-40	-31.6
抜歯 (extraction)	-14.4	-23.6	-49.4	-13.5	-52.4	-26.8	-30.0
フッ素 (fluoride)	-26.5	-16.4	-23.1	-29.1	-37	-8.1	-23.4
過剰歯 (excessive tooth)	-21.5	-24	-21.8	-12	-25.4	-21	-21.0
犬歯 (canine)	-12.5	-19.3	-35.4	-17.4	-23	-14.1	-20.3
第三大臼歯 (third molar)	-13.3	-12.8	-20.2	-17	-24.1	-24.1	-18.6
第一大臼歯 (first permanent molar)	-20	-12.4	-9.9	-13.5	-12.7	-34.9	-17.2
歯髄 (dental pulp)	-26.1	-1.8	-13.1	-8	-17.5	-34.2	-16.8
ブラッシング (brushing)	-19.7	-13.6	-16.5	-7.6	-20.3	-18.1	-16.0
乳歯 (milk tooth)	-14.9	-4.2	-11.8	-9.5	-27.8	0	-11.4
歯垢 (plaque)	-5.1	-5.5	-12.7	-17	-12.3	-15.6	-11.4
石灰化不全 (mal-calcification)	-7.3	-7.1	-8.8	-12.7	-12.7	-12.7	-10.2
乳歯冠 (crown)	-5.2	-11.9	-10.7	-6.2	-13.3	-13.3	-10.1
歯石 (dental calculus)	-26.1	-10.6	-13.4	-3.2	-10.4	6.3	-9.6
八重歯 (double tooth)	-17.6	-10	-2.6	1.3	-15.4	-8.7	-8.8
歯周病 (periodontal disease)	-14.4	-11	-4.7	4.5	-17.7	-5.5	-8.1
糸きり歯 (eyetooth)	-37.8	-7.4	-5	2.4	-1.6	9.5	-6.7
フロス (dental floss)	-40.3	2.2	-3.7	12.4	2.9	-7.1	-5.6
レジン (dental resin)	-6	-1.6	-4.8	4.2	-4.5	-10.1	-3.8
減形成 (hypogenesis)	-0.3	-3	-3.1	-2	-4.4	-4.4	-2.9
叢生 (crowding)	-0.9	-2.1	-6.3	5.6	-6.3	-6.3	-2.7
銀歯 (capping)	-6.2	-0.9	-7.3	1.9	-3.7	1.9	-2.4
ラバーダム (rubber dam)	-1	0.5	-1.2	-2.7	0.5	-5.1	-1.5
リーウェイスぺース (leeway space)	0.8	-0.5	-1.9	0.5	-1.9	-1.9	-0.8
親知らず (wisdom tooth)	0	0	-2.6	0	0	0	-0.4
齲蝕 (tooth decay)	-7.5	20.2	-2.8	16.1	26.5	0.9	8.9
プラーク (dental plaque)	-34.4	20.3	17.5	19.6	16.4	18.6	9.7
インプラント (implant)	6.6	3.9	21.5	35.8	38.2	-28.5	12.9

1): first year dental students

2): fourth year dental students

3): fifth year dental students

4): sixth year dental students

5): residents of the first year

6): pediatric dentists

小児歯科を含めた歯科外来に限らず、社会一般においても頻りに使用される歯科用語であるためと考えられた。これは吉本ら⁹⁾の結果とほぼ一致しており、特に、近年の歯科用品に関するテレビコマーシャル、雑誌などのマスメディアを介した情報提供により、フッ素、歯肉、歯垢、歯周病、歯石などの用語の認知率が高くなったものと考えられる^{9, 10)}。それに対し「知っている」と回答した人が20%以下であった、リー

ウェイスぺース、減形成、ラバーダム、叢生、レジン、石灰化不全、乳歯冠の7項目については、専門性が高く小児歯科外来でも使用する機会が少ない、またはそれについて説明する際に、他の平易な言葉で代用しているため認知率が低いものと考えられた。特に小児歯科外来での歯科治療時に比較的用いられる頻度の高いラバーダム、レジン、乳歯冠はそれぞれゴムマスク、白い詰め物、銀歯などと言い換えて説明し

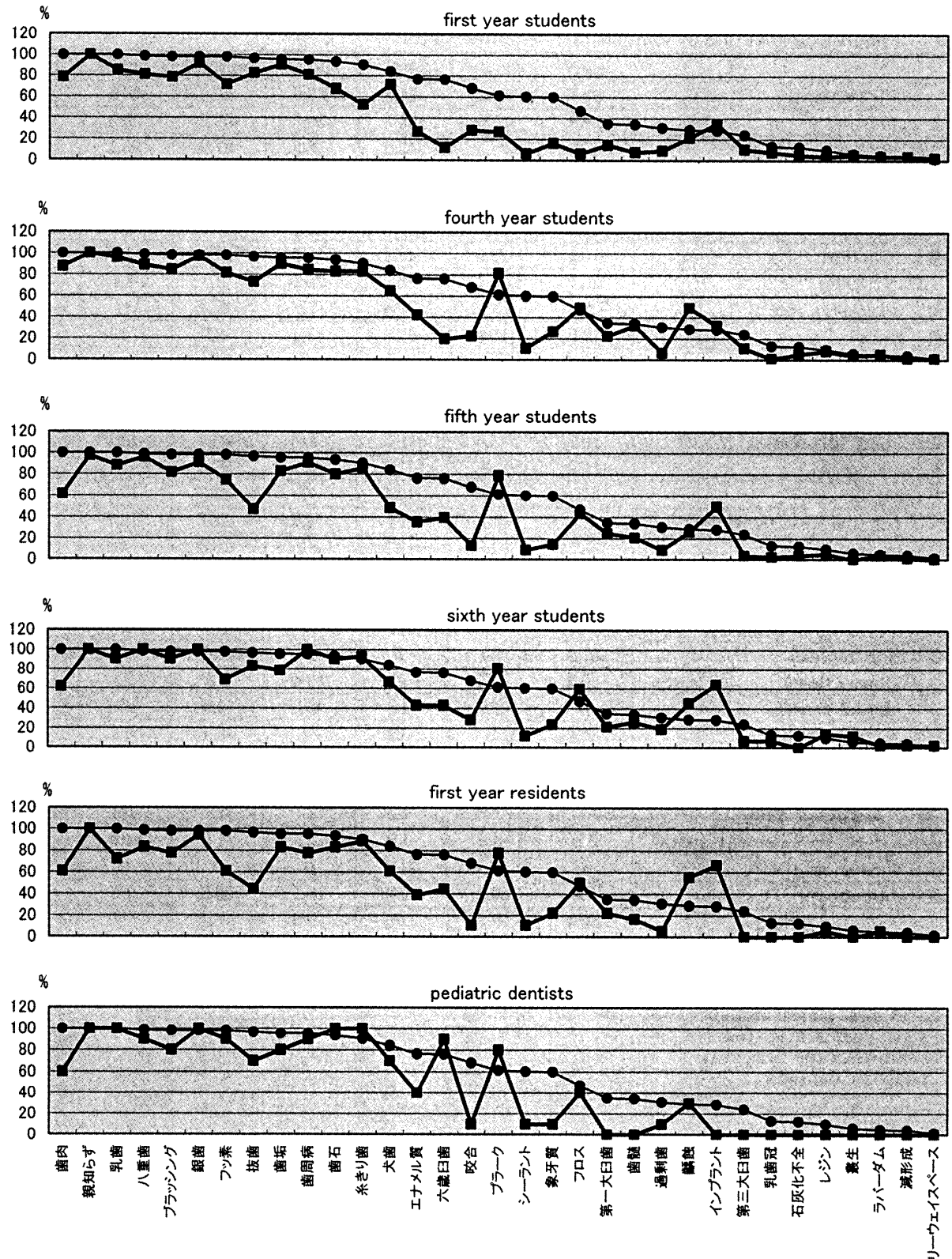


Fig. 1. The recognition rate of dental terminology in guardians of child patients (●) and the speculated rate by dentists and dental students (■)

ているため低い認知率になったと考えられた。4組に分けて比較した同意語のうち、糸切り歯および犬歯では、ともに認知率が高く、説明を

行う際に、どちらの用語を使用しても理解が得られやすいと考えられた。六歳臼歯および第一大臼歯については、吉本ら⁹⁾の結果同様、六歳

臼歯という言葉の認知率が第一大臼歯に比べて高い結果となった。六歳臼歯は、萌出時期を目安に分かりやすく置き換えた用語であり、第一大臼歯はかなり専門的な用語であるために、六歳臼歯のほうが馴染み深い用語として認知率が高かったものと思われる。一方親知らずは100%の保護者が知っているが、第三大臼歯は専門用語として使用されているため、一般の認知率は非常に低かった。

推測値と実際の認知率との差については、歯科学生1年から6年までと臨床研修歯科医師、小児歯科医師と、歯科学との関わりが長く、深くなるのが保護者の用語認知の推測に何らかの影響を与えるのではないかと予想していたが、特徴的な一定の傾向を見出すことはできなかった。ほとんどの項目においてアンダーに推測されていることが多く、このことは、認知率の低い歯科用語を用いた、保護者にとって理解しにくい形での治療内容の説明が行われる可能性は低いのではないかと考えられる。ただ、別な見方をすれば、知っているとの保護者からの回答は必ずしも内容を十分に理解していることを意味するものではないことをも考慮する必要があると思われる。

推測値と実際の認知率に関して、いくつかの特徴を取り上げてみたい。もっともアンダーに推測された用語は「咬合」であったが、1年生ではアンダーの程度が最も少なかった。「シーラント」「エナメル質」「象牙質」はすべての集団においてアンダーに推測され、保護者が予想外にこれらの用語を認知していることが示された。逆にオーバーに推測された用語は、「インプラント」で小児歯科医以外は保護者が認知していると推測していた。「プラーク」もオーバーに予測されることが多かったが、1年生のみはかなりアンダーに予測していた。「齶蝕」は1年生と小児歯科医でアンダーに予測されたが、それ以外はオーバーであり、歯科大学に入学して間もない時期ではまだ学習していないために、保護者が認知していないと予測する一方、小児歯科医になって保護者と接してみると、経験的に

「齶蝕」が認知されていないことを体験するようになるのかもしれない。

歯科用語に対する保護者の認知率と、説明を行う側の推測との間にはアンダーであろうとオーバーであろうとかなりのギャップがあることが明らかになり、十分なインフォームドコンセントを得るためには、相手の理解度を確認しながらの説明が必要であると考えられた。

結 語

望ましい「患者-歯科医師関係」を作り上げる上で、歯科における専門用語は相互のコミュニケーションにとって、一つの障害ともなりうることから、その認知率を患者サイドと歯科医療者サイドの両方から検討した。その結果両者の認知は必ずしも一致せず、説明を行う際にはこの点を念頭に置く必要があると考えられた。

文 献

- 1) 矢島安朝：歯学教育改革のなかでのメディカル・インタビュー 歯学教育改革が求める歯科医師像, デンタルダイヤモンド, 29: 122-130, 2004.
- 2) 吉田登志子, 宮脇正一, 新井英雄, 鳥井康弘, 荒川光, 下野勉, 吉山昌宏, 永井教之：客観的臨床能力試験 (OSCE) のステーション間におけるコミュニケーション技能の関連性について, 日歯医教会誌, 19: 332-342, 2004.
- 3) 石井拓男：メディカル・インタビューとは？ メディカル・インタビューの3つの柱, デンタルダイヤモンド, 29: 100-107, 2004.
- 4) 和栗佳子：メディカル・インタビュー臨床現場から こんな患者が来院したら… 小児患者に付き添っている親(家族)に話す場合, デンタルダイヤモンド, 29: 56, 2004.
- 5) 佐伯晴子：健康な心と身体は口腔から 歯科医療におけるコミュニケーション再考 模擬患者或いは一般人から見た歯科医療とコミュニケーション, 日歯医会誌, 23: 8-12, 2004.
- 6) 本間宗一, 山田晃久：「双方向」の医療に必要なコミュニケーション 実践コミュニケーション患者さんが聞く耳をもつために 問診から歯科医療面接 (Dental Interview) への転換, Quintessence, 24: 964-968, 2005.
- 7) 岡田智雄, 横澤茂：歯科臨床に活かす医療面接技法, 東京歯医師会誌, 53: 367-374, 2005.
- 8) 保坂誠：メディカル・インタビューに関するカウンセリングの手法 患者の情報を正確に得る手法とは?, デンタルダイヤモンド, 29: 110-119, 2004.

- 9) 吉本新一郎, 柴田沙世子, 白須賀明子, 東昇一, 浅川剛吉, 網野直人, 浅里仁, 井上美津子, 佐々龍二: 歯科用語に関する認知率調査—小児患者とその保護者を対象に—, 昭和歯会誌, 22: 70, 2002.
- 10) 森田一三, 外山敦史, 熊谷法子, 福沢歌織, 山本恭子, 中垣晴男, 立松正志, 川口豊造: インターネット調査による歯科に関する用語の認知と個人属性の関係, 口腔衛会誌, 53: 211-220, 2003.
- 11) 梅津和子, 萩原明人, 信友浩一: 医療コミュニケーションを妨げる曖昧な言語表現について—用語の理解に関する調査, 医療と社会, 13: 103-119, 2003.
- 12) 大槻純子: 学生が目で見たインフォームドコンセントの問題点—非医療従事者に対して行ったアンケート調査より, 福岡歯大会誌, 30: 79-81, 2003.
- 13) 深井穫博: わが国の成人集団における口腔保健の認知率および歯科医療の受容度に関する統計的解析, 口腔衛会誌, 48: 120-142, 1998.